第3章　魅惑の歌声

小鳥のさえずりという言葉から不快な感覚を抱く人はまずいない。それは耳をそばだたせ、心を引きつける。それも、ソプラノのような高くこまやかで澄んだ女声をイメージさせる。それが関係しているのかどうかは分からないが、ギリシア神話に登場する歌姫には鳥への変身が語られるものが多い。本章で取り上げるのはセイレーン、ムーサ、ピーエリデスであるが、第I部第10章で述べるハルピュイアやスフィンクスも女性である。

1　セイレーン

ライン川のローレライに代表されるように、通りかかる船の水夫を歌によって虜にする魔女というのはメルヘン的な要素であるが、ギリシア神話ではそれがセイレーンとして現れる。ホメーロス『オデュッセイア』では、セイレーンたちの島は魔女キルケーの住む島アイアイエーからすぐのところにあり、故国イタケーへの帰還を目指す英雄オデュッセウスの一行がここへさしかかったとき、彼女らは次のよ

うに歌って誘惑したという。

さあ、ここへいらっしゃい、機略に富むオデュッセウスよ、ギリシア軍の大いなる誉れよ。船を止めて、われらの声を聞かれるがよろしい。これまで誰が黒い船でここを通りかかっても、われらの口から流れ出る蜜の響きの声を聞かなかったことはない。必ず、喜びを覚え、知識を殖やして去ったのだ。というのも、われらはあらゆることを知っている。広きトロイアにおいてギリシア勢とトロイア勢が神々の意志により苦労したかぎりのことも、豊穣な大地に生じるかぎりのことも知っているのだから。

（『オデュッセイア』一二・一八四―一九一）

しかし、オデュッセウスは魔女キルケーからあらかじめ注意を受けていたため、仲間のすべての耳を蠟で塞ぐ一方、自分の体をきつく縛って帆柱に括りつけさせていた。そうして英雄はセイレーンの歌の誘惑から逃れた。

英雄は知略を用いて歌の魅力に負けなかったが、ホメーロスに心酔し、その詩作を範としたのちの叙事詩人たちは、セイレーンを自分の詩にも登場させたいという欲求に勝てなかったらしい。ヘレニズム時代にロドス島で活躍したアポッローニオスは、アルゴー船の英雄たちの冒険を歌った『アルゴナウティカ』において、次のような場面を描いている。

すぐに彼らは美しい島アンテモエッサを目にしたが、そこでは澄んだ声のセイレーンが災厄をなしていた。これはアケローオスの娘らで、甘い声で歌い、誰であれ舫い綱を投げる者を魅惑した。彼女らをアケローオスと床を共にして産んだのは、姿美しいテルプシコレー、ムーサの一人であっ

た。かつてはデーオー［デーメーテール］の気品ある娘［ペルセポネー］がまだ嫁がぬときに側仕えをし、一緒に歌舞を楽しんだ。だが、このとき、体の一部は鳥に、一部は乙女に似た姿をして、まわりがよく見渡せる港からいつも目を光らせつつ、実にたびたび多くの者から懐かしい故国への帰還を奪うや、痩せ細らせて滅ぼしていた。彼女らは相手が英雄たちでも一顧だにせず、その口から白百合のごとき声を放った。英雄たちは船から岸へといままさに舫い綱を投げようとしたが、オイアグロスの子にしてトラーキア生まれのオルペウスがビストニア[1]の竪琴を手にとって弦を張るや、急ぎ足を速めるような歌の調べを響かせた。そのため、一緒に打ち鳴らされる音響が聞く耳を混乱させ、乙女の声は竪琴に圧倒された。船は西風に運ばれるとともに轟く波が艫から後押しし、乙女らの放つ声も聞き分けられなくなった。それでも、テレオーンの立派な息子ただ一人が仲間を出し抜き、磨かれた漕ぎ座から海に飛び込んだ。セイレーンたちの澄んだ声に心とろけたブーテースであった。彼は暗い波間を泳いで岸へ上がろうとした。愚かな男だ。すぐさまその場で帰還を奪い取られるところであったが、彼にエリュクスを治める女神が憐れみを覚えた。彼がまだ渦潮の中にいたところをキュプリスがすくい上げて助け、恵み深く姿を示し、リリュバイオンの岬に住まわせた。

（『アルゴナウティカ』四・八八九―九一九）

アンテモエッサは「花が咲き乱れる」というほどの意味で虚構の地名であるが、アケローオスはギリシア中西部、アイトーリア地方とアカルナーニア地方の境を北から南に流れる川[2]、エリュクスはシキリア島西端にあってアプロディーテー（キュプリスはその別名）の有名な神殿のある町、リリュバイオンはエリュクスより南に少し下がった町で、いずれも現実の地名である。そこで、アポッローニオスの叙述に

よれば、セイレーンは、第一に、ムーサの一人を母とする、第二に、もとは乙女であったが鳥の姿に変身した、第三に、ギリシアに生まれたがイタリアに移り住んだ、ということになる。

このうち、第一の点は、言うまでもなくセイレーンの声の魅力をムーサによって説明している。ムーサは、ヘーシオドスが、

さあ、私はムーサたちから始めよう。女神たちはオリュンポスに住む父神ゼウスをほめたたえ、その偉大な心を喜ばす。いまあること、これから起こること、以前に起こったことを語り、声を一つに合わせる。女神たちの口からは疲れを知らぬ声が甘く流れる。と、雷鳴を轟かす父神ゼウスの館も微笑む。女神たちの白百合のごとき声が振り撒かれるから。　（『神統紀』三六―四二）

とたたえたように、詩歌の技術を司り、歌声が流れ出す源泉であり、歌に盛るべき題材としての現在・過去・未来にわたる知識の宝庫を備えている。この点で、単に魅力的な歌声というだけでなく、先に引用した『オデュッセイア』でのセイレーンの言葉が彼女らの「知識」を強調していることも、セイレーンのムーサとの類縁を示すものかもしれない。とりわけ、彼女らの知識の例として、トロイア戦争という歌にたたえられるべき事績が挙げられていることは興味深い。また、母親とされるムーサの一人テルプシコレーの名は、テルプシス（喜び）とコロス（歌舞）という語からなり、セイレーンたちがかつてペルセポネーの側仕えとして歌い舞っていたことに対応している。

セイレーンのプロフィールは、さらに、古注に見られる次の二つの説明により補足される。

彼女らは、乙女でいることを欲したためにアプロディーテーの憎しみを買い、鳥に変えられた。

そして、テュレーニア海のあたりへ飛び去り、アンテムーサと呼ばれる島に落ち着いた。彼女らの名前はアグラオペーメー、テルクシエペイア、ペイシノエー、リゲイアであった。

（古注ホメーロス『オデュッセイア』一二・三九）

羽根が生えていて、下半身は鳥、上半身は人間であったが、彼女らをムーサたちが歌競べで負かしたときに彼女らの羽根で作った冠をかぶった。ただし、テルプシコレーだけはそうしなかった。セイレーンたちの母親だったからである。クレータのあたりでこの出来事があったことから、アプテラ［羽根なし］という町の名も、敗れたセイレーンがそこで羽根を投げ捨てたことにちなんでいる。

（古注リュコプローン二・二一八・一五―一九）

セイレーンが鳥となった原因はアプロディーテーの憎しみとされているが、男女の交わりを嫌ったために、この恋の女神の怒りによって災いを蒙るというのはよくある話の筋である。たとえば、ヒッポリュトスは処女神アルテミスを信奉して狩りに熱中するばかりであった。それに怒ったアプロディーテーは、継母パイドラーの心にヒッポリュトスへの恋の火をつけ、彼を誘惑させた。それを退けたヒッポリュトスは、継母が父テーセウスに讒言（ざんげん）したことから、父の呪いにより身を滅ぼすことになった。また、セイレーンたちが側仕えしたというペルセポネーは冥界の神ハデースにさらわれたが、オウィディウス（『変身物語』五・三七六以下）によると、これも、彼女を乙女のままにしておかぬようにというウェヌス（アプロディーテー）の企みであったという。[3]

しかし、結局のところ、セイレーンは鳥の姿を失ってしまったらしい。その理由は母親および叔母たちとの歌競べに負けたためというのだが、歌競べの場所がどうしてクレータなのかもよく分からず、い

かにも奇妙な話である。ただ、アプテラはクレータの北西岸に実在する町で、町の名前を説明するために縁起譚が作り出されることはよくあり、また、次節で取り上げるムーサとピーエリデスも似た者同士の歌競べであることから、それは、こうしたパターンの話が少なくとも好まれたことを示しているのかもしれない。なお、セイレーンの名前として挙げられているアグラオペーメー、テルクシエペイア、ペイシノエー、リゲイアはそれぞれ、「輝く声」「魅惑の言葉」「得心」「澄明」というような意味である。

さて、ウェルギリウスも『アエネーイス』にセイレーンを登場させているが、

［アエネーアース率いる船隊は］いまや、セイレーンの岩場まで近づくところまで来ていた。そこはかつての難所、大勢の人の骨で白く見える場所で、このときは岩に潮が絶えず打ちつける轟きが遠くまで聞こえていた。

（『アエネーイス』五・八六四―八六六）

とあるだけで、実にそっけない。実は、セイレーンのためにアルゴー船の英雄たちのうちブーテースただ一人が失われたように、この海域でアエネーアースの船の舵取りであるパリヌールスも、一行の中で一人だけ命を落とした。だがそれは、眠りの神に力を奪われ、必死にすがりつく舵もろとも海中へ突き落とされたためであった（同五・八三三―八六一）。パリヌールスは近くの岬に自分の名前を残した。それが現在のパリヌーロ岬であるとすれば、ナポリから一〇〇キロメートルあまり南の場所である。アエネーアースのイタリア上陸地であるクーマエはナポリの西一五キロメートルほどのところにあるので、もし彼がセイレーンの歌声に魅了されることがあったとしても、急ぎ足で休みなく歩けば一日で行ける距離ということになる。それでは、イタリアに新しい祖国を築こうとしているアエネーアースが、故国を思って痩せ細った末に死ぬことなど考えられない。英雄にとって「そこはかつての難所」だったので

ある。

2　ムーサとピーエリデス（ピーエロスの娘たち）

右に引用した古注によれば、ムーサはセイレーンらの羽根で作った冠をかぶったこともあるようだが、翼をつけて空を飛んだという話もオウィディウスによるものだけながら伝えられている。詩人の語るところに従えば、ムーサたちが住むヘリコーン山には天馬ペーガソスが蹄で蹴って湧き出させたというヒッポクレーネーという神聖な泉があり、古くからの森、洞穴、数限りないさまざまな彩りの草花に囲まれて、その暮らしは平安そのものと思われるが、ムーサの一人ウーラニアによると、乙女であるムーサたちにはどんなことでも心配を抱かせることになるという（『変身物語』五・二五〇―二九三）。彼女はそうした心配の種の一つとして、次のような物語をする。

忌まわしいピュレーネウスのことが目の前に浮かび、いまだに心の動揺を払拭しきれていません。トラーキア軍を率いてダウリスとポーキスの野を占領したのがあの凶暴な男で、不当に王国を掌握していたのです。私たちはパルナッソスの神殿へ向かっていたのですが、その道行きを目にすると、彼は私たちの神威を崇めるかのような顔を装って言いました。「記憶の女神ムネーモシュネーの娘さんたち――彼には分かっていたのです――、立ち止まって、ご遠慮なく、どうか私の家の屋根の下であいにくの空模様と雨を――ちょうど雨になっていたのです――しのいでください。もっと狭いあばら屋にも天上の神々が入ったことは何度かあるのですから」。その言葉と天候に心を動かされて、私たちはこの男の言うとおりにし、家の門口に入りました。それから雨がもうやんだあと、

北風を南風が打ち負かし、黒雲が晴天の反撃にあって逃げ出そうとしているときでした。出かけようと気が急きましたが、ピュレーネウスが自分の家を閉めて暴力に訴えようとします。その窮地を私たちは翼をつけることで脱出しました。彼のほうは、追いかけてこようとするかのように高く聳える城塞に立つと、「おまえたちに進む道があるところなら、私にも同じ道があるだろう」と言うや、身を投げる狂気の沙汰、櫓の高みのてっぺんより頭から先に落ちて顔の骨は砕け散り、衝撃で彼の命を奪った地面は罪深い血に濡れました。

（『変身物語』五・二七四―二九三）

ピュレーネウスについては、この箇所以外に典拠がないため、はっきりしたことは分からないが、トラーキアからデルポイの神託所を擁するパルナッソス山の麓まで遠征し、そこに広がる平野を占領したというのであるから、相当の大軍勢を率いていたに違いない。それにしては、配下の者を動かした様子がなく、たった一人で乙女とはいえ九人もいる女神に襲いかかり、あげくに、言ってみれば、自分から勝手に死に果てたような奇妙な叙述となっている。しかしこれは、表向きかよわい乙女のように見え、実際、そのようにも振る舞ってはいるが、その裏に女神としてそれだけの威光と力を隠し持っていることを巧みに暗示した語りであるのかもしれない。とにかく、ムーサはどんな話でも語って聞かせられる女神なのである。

そこで、ムーサに歌競べを挑もうなどという考えは傲慢の極みと言わなければならないが、そうした挑戦は少なくとも三例ほど知られている。セイレーンの挑戦についてはすでに触れた。二つ目は、ホメーロスによって次のように語られている。

ここ［ギリシア中西部アルカディア地方の町ドーリオン］は、ムーサたちがトラーキア人タミュリス

に歌をやめさせたところ。彼はオイカリアを発ち、オイカリア王エウリュトスのもとよりやってくるや、高言を吐いた、必ずや勝ってみせよう、たとえほかならぬムーサ、アイギスをもつゼウスの娘らを相手に歌おうとも、と。女神らは憤激して彼を不具の身にしたうえ、神のごとき歌を取り上げ、竪琴のこともすっかり忘れさせた。

（『イーリアス』二一・五九四―六〇〇）

三つ目の例がピーエリデスであり、これも、右に述べたピュレーネウスの話に続いてオウィディウスが伝える物語である（『変身物語』五・二九四―六七八）。それによると、ムーサの住むヘリコーン山にはまた、人間そっくりの声であいさつする鳥がいた。これらは全部で九羽おり、自分の運命を嘆いているカササギだった。これらについてムーサの一人が物語る。

彼女らもついこのあいだ歌競べに負けて鳥の仲間に加わりました。父親はピーエロスといってマケドニアの地の大領主、母はパイオーニア出身のエウイッペーでした。彼女が安産の効験あらたかなルーキーナ女神に加護を願って九度の呼びかけをし、九度の出産をすることとなりました。愚かな姉妹たちは数の多さを鼻にかけ、数々のテッサリアの町々、数々のアカイアの町々を経て、ここまでやってくると、こんな言葉で挑戦を仕掛けました。

「無知な俗輩を中身のない魅力で誑かすのはやめなさい。胸に自信があるのなら、私たちと勝負なさい、ヘリコーンの女神さま方よ。声音でも技量でも私たちは負けませんし、数だって同じです。あなた方が負けたなら明け渡してもらいましょう、メドゥーサの泉もボイオーティアなるアガニッペーの泉も。私たちが負ければ、雪深いパイオーニアまでエーマティアの平野を明け渡します。勝負の軍配はニンフらに預けましょう」。

（『変身物語』五・三〇〇―三一四）

こうして始まった歌競べは、まずピーエリデスの代表から歌い始めた。その題目は巨人族と神々の戦いで、怪物テュポエウスがオリュンポスの神々を恐怖に陥れ、エジプトへと潰走させた次第であった。

ユッピテルは群れを率いる羊に化ける。そのため、リビアのアンモーン神は、いまでも反り返った角を持つ姿をしている。デーロス島生まれの神アポッローンはカラスに、セメレーの子たるバッコス神は山羊に、ポイボスの妹神ディアーナは猫に、サートゥルヌスの娘なる女神ユーノーは雪白の牝牛に、ウェヌスは魚に、キュッレーネー生まれの神メルクリウスはトキとなって身を潜めた。

（同五・三二七―三三一）

このようにピーエリデスにより神々の惨めな姿が歌われたあと、ムーサを代表してカッリオペーが竪琴を弾じながら歌った。主題は、豊穣の女神ケレース（デーメーテール）の娘プローセルピナ（ペルセポネー）を冥界の王ディース（ハデース）がさらって妻とした次第で、恋の女神ウェヌスがクピードーにディースの胸へ恋の矢を打ち込ませてプローセルピナに一目惚れさせたことから、さらわれた娘をさがして悲嘆にくれながらケレースが世界中を彷徨したこと、そのために大地に作物が育たず疲弊したこと、結局、ユッピテルの仲立ちによりケレースとディースのあいだに和解が成立、プローセルピナは一年を二つに分けて天界と冥界それぞれに六カ月ずつ暮らすように決まったこと、そして、ケレースはアテーナイの若者トリプトレモスにいろいろな穀物の種子を託して大地に実りを広めさせたこと、これらの本筋にさまざまな脇筋を挿みながら語っていった。脇筋というのは、たとえば、アスカラポス[4]や先に触れたセイレーン、またシキリアの泉のニンフであるアレトゥーサのことなどが語られる。

さて、カッリオペーが歌い終わると、審判のニンフたちは一致してムーサの勝利を宣言した。ところ

が、ピーエリデスが悪罵を吐いたので、ムーサたちが警告した。

「おまえたちは勝負を挑むだけで処罰に値したのに、それをなんとも思わず、罪の上に悪口を重ねる。私たちにも辛抱できることとできないことがある。だから、これから報いを下す。怒りが命じるとおりを遂行する」。

それでも、エーマティア生まれの娘らは笑いながら、脅しの言葉を馬鹿にしましたが、なお話そうと試み、大きな叫びを上げながら恥知らずにも手まで出そうとしたとき、その手の指のあいだに羽根が生え出で、腕が羽毛で包まれるのを目にすることとなりました。そばにいる者同士で相手の顔に固い嘴がせり出すのを見、これまで見たことのない鳥が森に加わりました。胸を叩こうと欲するあいだに、腕の動きで体がもち上がって空に浮き、森の悪口屋たるカササギとなったのです。鳥になったいまでも昔の能弁は変わらず、騒々しいお喋りとやむことのない話し好きは残りました。

（同五・六六五―六七八）

さて、ピーエリデスについては、オウィディウスが典拠としたかもしれない別伝の梗概が残っている。ニーカンドロス『変身譚』第四巻に語られていたとされるもので、次のようなものである。

ゼウスはムネーモシュネーとピーエリアーで交わってムーサらをもうけた。その頃、エーマティアの王であったのは土着の人ピーエロスで、彼には九人の娘が生まれた。彼女らはムーサに対抗して歌舞団を組み、ヘリコーン山上でムーサの技をめぐる競技が行われた。さて、ピーエロスの娘らが歌ったときはすべてが暗くなり、その歌舞に聞き入るものは何一つなかったのに、ムーサのとき

は天、星、海、河川がじっと動きを止める一方、ヘリコーンが喜びのあまり感無量となり天へと伸びたので、ついにはポセイドーンの配慮によりペーガソスが山頂を蹄で蹴って止めることとなった。死すべき人間の娘たちは女神と争ったためにムーサたちによって姿を変えられ、九羽の鳥となった。これらはいまでも人々のあいだで、コリュンバス［カイツブリ］、イユンクス［アリスイ］、ケンクリス［キノドアオジ、チョウゲンボウ、ホオジロなど］、キッサ［カケス］、クローリス［カワラヒワ］、アカランティス［ゴシキヒワ］、ネーッサ［アヒル］、ピポー［キツツキ］、ドラコンティス［？］と呼ばれている。

（アントーニーヌス・リーベラーリス『変身物語集』九）

ムーサの歌を聞いてヘリコーン山が天へ伸びたというのは奇妙な叙述に思われるが、コリンナという女流詩人の抒情詩断片には、ヘリコーン山がキタイローン山との歌競べに敗れた悔しさから、岩を砕いて無数の石にしたという一節（断片六五四・一・一二―三四、キャンベル）があり、この山は感情の起伏が激しかったのかもしれない。それはともかく、この話形では娘らが九人それぞれ別の鳥に変身した点がオウィディウスの場合と大きく違っている。いずれも声音よろしくさえずる小鳥のようだが、九種類の異なる響きが妙なるハーモニーを奏でたものか、やかましさを増すだけのものだったかは分からない。

［注］

（1）トラーキアに同じ。

（2）言及されるのはその河神、第Ⅱ部第3章第4節2の「アケローオスの例話」の項も参照。

（3）次節「ムーサとピーエリデス」参照。

（4）第Ⅰ部第5章第1節「アスカラポス」参照。